

ともにうたうたのしみ

石和温泉 芸妓芸能



ごあいさつ

花街では芸妓が宴席に呼ばれた際、席につかせていただいたお礼として最初に「お座付き」と呼ばれる唄を三味線にのせて唄います。

そして「お座付き」の後には「端唄」を歌います。「端唄」には、三味線や太鼓の賑やかな伴奏に合わせて歌い踊る「せつほんかいな」などのさわぎ唄や、「かっぱれ」「奴さん」などの時代時代の民衆の世相をうかがう田舎唄などがあり、江戸末期から明治にかけて一世風靡しました。芸妓の伝統と格式を現代まで引き継ぎ、それぞれの唄に込められた心情を豊かに表現するよう努めています。ぜひ一緒に歌っていただき、伝統文化を味わっていただければと思います。



石和温泉芸妓文化について

石和芸妓の誕生は、石和温泉湧出後間もない昭和38年半ばに遡ります。石和の観光旅館やホテル、地域のイベントなどにおいて、踊りや三味線、鳴り物といった伝統芸能を披露し、石和温泉の観光振興と日本の伝統文化の保存・継承に努めております。そして、舞踊には武田節をはじめとする郷土山梨の特色を生かした演目を取り入れるなど、観光客の皆様にも山梨の魅力を伝えることも私たちの大切な使命です。

このパンフレットを通じて石和温泉芸妓による芸能を一緒にご体感いただき、その魅力の一端を感じていただければと思います。伝統芸能に関心を持ちながらも、今一步踏み込まずにいらっしゃる方にとって、私たち石和温泉芸妓がその橋渡し役になれましたら幸いです。



甲斐の山々 陽に映えて われ出陣に うれいなし
おのおの馬は飼いたるや 妻子につつが あらざるや あらざるや

祖霊まします この山河 敵にふませてなるものか
人は石垣 人は城 情けは味方 仇は敵 仇は敵

疾きこと風の如く 徐かなること林の如し
侵掠すること火の如く 動かざること山の如し

躑躅ヶ崎の 月さやか うたげを尽せ 明日よりは
おのおの京をめざしつつ 雲と興れや 武田武士 武田武士

解説 甲斐の山々陽に映えて、武田軍団出陣の時は馬上豊かに「妻子に恙が非ざるや」と呼びかける名将・信玄公は情将でもあり、武田家の祖霊のおわす、この山河を敵に踏ませてなるものか、甲斐の国は甲斐の人で守らねばならない、人は石垣、人は城であると甲斐の人に絶対の信頼を寄せ、やがては躑躅ヶ崎の館に宴の月冴え、明日は京都を目指して夏雲のように興る武田武士には、すでに敵を飲み込む気概があったと、武田家の全盛を表す民謡です。



武田節

「甲州民謡」

(かっぼれ かっぼれ ヨーイトナヨイヨイ)
沖の 暗いのに 白帆が サー 見ゆる (ハーヨイトコリヤサ)
あれは 紀伊の国 ヤレコノ コレワイノサ (ヨイトサッサッサ)
蜜柑船じゃえ (ンサテ 蜜柑船) 蜜柑船じゃ サー 見ゆる (サテ ヨイトコリヤサ)
あれは 紀伊の国 ヤレコノ コレワイノサ (ヨイトサッサッサ)
蜜柑船じゃえ ンサテ 豊年じゃ 満作じゃ (サテ)
明日は 旦那の稲刈りで (サテ)
小束に絡げて ちよいと投げた 投げた (セッセ) 枕に 投げた枕に
とがは無い オセセノ コレワイサ 尾花に 穂が咲いた この妙かいな
さて ねんねこせー ねんねこせ ねんねの お守りは 何処へ行った
あの山越えて 里へ行った 里のお土産[おみや]に 何もろた
でんでん太鼓に 笙[しょう]の笛 寝ろてばよ 寝ろてばよ
寝ろてば 寝ないのか この子はよー

解説 文化文政年間(1804~30年)に「願人坊主」が、白の行衣、墨染の腰衣、浅黄の投頭巾、赤緒草履の姿で花傘万灯を持ち「やあとこせ」と歌い江戸市中を踊り歩いたことが始まりと言われています。また、神事から出た住吉踊の流れで「かっぼれ、かっぼれ、甘茶でかっぼれ」の歌詞を特徴とし、豊年踊に卑俗滑稽な踊りを混ぜ、大道芸として人気を博しました。全体は蜜柑船、豊年満作、子守歌、それぞれルーツのことなる3つの部分からなりますが、明治期には一続きの曲「かっぼれ」として人気を博し、歌舞伎や花柳界、寄席で歌い、踊られるようになりました。



かっぼれ

「端唄」 ※(内を)唱和ください

(ハーコリヤコリヤ)
エー奴さん どちらへ行く (ハーコリヤコリヤ)
旦那を 迎えに さつても寒いのに 共ぞろい
雪の降る夜も 風の夜も (さて お供はつらいネ)

いつも奴さんは 高ばしより (ハーコリヤコリヤ)
それはそうかいなあえ

(ハーマダマダ)
エー姐さん ほんかいな (ハーコリヤコリヤ)
きぬぎぬの言葉も交わさず あすの夜は
裏の窓には わし一人 (さて あいずは良いか)

しゅびをようして 逢いに来たわいな (ハーコリヤコリヤ)
それもそうかいな (ハーコリヤコリヤ)

解説 人の代わりに腰掛けや水垢離(みずごり)をする「願人坊主」と呼ばれた僧が、街頭で披露したする大道芸に「伊勢音頭」がありました。今日の民謡「伊勢音頭」に続けて最後に「エー奴さんどちら行く」と唄うのがお決まりでした。その後半部分が様々な替え唄を生み出しながら寄席や花柳界に広まり、その軽妙さが大衆に大いに受け入れられ、今では端唄と言えば「奴さん」と思われるほどになりました。



奴さん

「端唄」 ※(内を)唱和ください

獅子は せつほんかいな 獅子は喰わねど 獅子喰い喰いと
雨やあられや かんろばい
(ぞろりやぞろりや ぞんぞろり 目出度いな 目出度いな)

橋の せつほんかいな 橋の欄干に腰打ち掛けて 向う遙かに
見渡せば 弁天 松島 小松島 キュッキュと立ったは
アリヤ 何じゃ あれかいな あれかいな

昔々 その昔 ずっと昔の大昔 九郎 せつほんかいな
九郎判官 義経様は静御前を伴に連れ 吉野を目指して
落ちたもう ヨンポリヨンポリ ヨヨンポリ
烏帽子かりぎぬ 烏帽子おり

(ぞろりやぞろりや ぞんぞろり 目出度いな 目出度いな)

解説 「せつほんかいな」は「噂は本当かな」という意味です。もともと徳島阿波地方の俗謡だったのが、阿波の藍商人を通して宴席の座敷唄として全国に広まったと言われています。江戸時代の各地方には、年の暮れになると「節季で候 めでたいな めでたいな」とはやしなが、家々を回る「節季候(せきぞろ)」と呼ばれる芸人がいました。経済の発展と共に各地の端唄は江戸に伝えられアレンジされて、明治以降は現在の歌詞で唄われるようになりました。賑やかで調子もよく、「目出度いな 目出度いな」の部分で唱和するのがお決まりの楽しい「さわぎ唄」です。



せつほんかいな

「端唄」 ※(内を)唱和ください